新品種候補（2022年1月作成）

育種事業課題名：てんさい新品種候補「H154」の概要（722511）

担当部署：北見農試・研究部・麦類畑作グループ、十勝農試・研究部・豆類畑作グループ、
中央農試・作物開発部・作物グループ、上川農試・研究部・生産技術グループ、
北海道農産協会

キーワード：てんさい、褐斑病抵抗性、多収、そう根病抵抗性

１．特性一覧表

系統名：「H154」　交配：「MS102」×「POL106.007」
特性：長所１　褐斑病抵抗性が“中”である。
普及見込面積：令和７年度以降 14,000ha

試験場所	北見農試、十勝農試、中央農試、北海道農産協会		
調査年次	平成30年，令和元～３年		
品種・系統名	H154	アマホマレ (標準品種)	パピリカ (対照品種)
倍数性	二倍体	三倍体	二倍体
種子の胚数	単胚	単胚	単胚
胚軸の赤色個体	少	やや多	中
草姿	やや直立	中間	やや直立
葉長	中	中	中
葉数	やや少	中	多
葉色	緑	緑	やや濃緑
葉形	やや披針	楕円	やや披針
葉面縮	やや多	少	中
葉身の大きさ	やや小	中	やや小
葉柄長	やや短	中	やや短
葉柄の太さ	やや太	やや太	中
根形	やや短円錐	やや短円錐	やや短円錐
根重（t/10a）	8.34（112）	7.44（100）	8.19（110）
根中糖分(%)	16.28（96）	16.97（100）	16.33（96）
糖量(kg/10a)	1359（108）	1262（100）	1338（106）
抽苔耐性	強	強	強
そう根病抵抗性	強	弱	強
褐斑病抵抗性	中	中	やや弱
根腐病抵抗性	やや弱	弱	やや弱
黒根病抵抗性	中	中	中

注１）形態的特性は北見農試の直播栽培による成績。
２）根重、根中糖分および糖量は、北見農試、十勝農試および北海道農産協会（３か所）ののべ20か所平均で、括弧内は「アマホマレ」に対する百分比。
３）特性検定は抽苔耐性（北見農試、令和２、３年）、そう根病抵抗性（北見農試、平成30～令和３年）、褐斑病抵抗性（十勝農試、平成30～令和３年）、根腐病抵抗性（十勝農試、平成30～令和３年）、黒根病抵抗性（中央農試、平成30～令和３年）の成績。

２　特記すべき特徴

「H154」の根重、根中糖分、糖量は「パピリカ」と比較して、ほぼ並である。また、褐斑病抵抗性が「パピリカ」の“やや弱”に対して“中”であり、「パピリカ」より強い。そう根病に抵抗性を持ち、その他の病害抵抗性も「パピリカ」並である。

３　優良品種に採用しようとする理由

平成22年に北海道優良品種に認定された「パピリカ」が普及して以降、てんさい作付け農家戸数およびてんさい作付面積は減少傾向であったものの、てんさいの総生産量は、ほぼ一定量を維持してきた。その理由の一つとして、てんさい品種の収量性の向上が挙げられる。「パピリカ」はこの収量性の向上を代表する多収品種であり、近年は主力品種として１万ヘクタールを超えて栽培され、てんさいの安定生産に大きな役割を果たしてきた。さらに「パピリカ」は、それ以前の主力品種にはなかったそう根病抵抗性を持つことから、北海道内で被害が顕在化して行く中で、そう根病対策としても重要な役割を果たしてきた。

一方で、「パピリカ」は褐斑病に弱く、夏期の高温で発病の進展が早くなって防除開始が遅れたり、多雨の影響で防除機械が圃場に入れずに防除間隔が長くなったりすると、褐斑病の発生が広がりやすく、多発年には大きな被害が発生することが問題となっていた。このことから、「パピリカ」の多収性およびそう根病抵抗性を維持しつつ、褐斑病抵抗性を向上させた品種が必要とされていた。

「H154」は、「パピリカ」並の多収で、また褐斑病抵抗性は「パピリカ」の“やや弱”に対して“中”である。このため、褐斑病の発生が「パピリカ」より広がりにくく、天候不良年などの病害多発時の被害が軽減されることが期待できる。また、「パピリカ」同様にそう根病に抵抗性を持ち、その他の耐病性も「パピリカ」並である。

以上から、「H154」を「パピリカ」に置き換えて普及させることで、てんさいのさらなる安定生産に貢献できる。

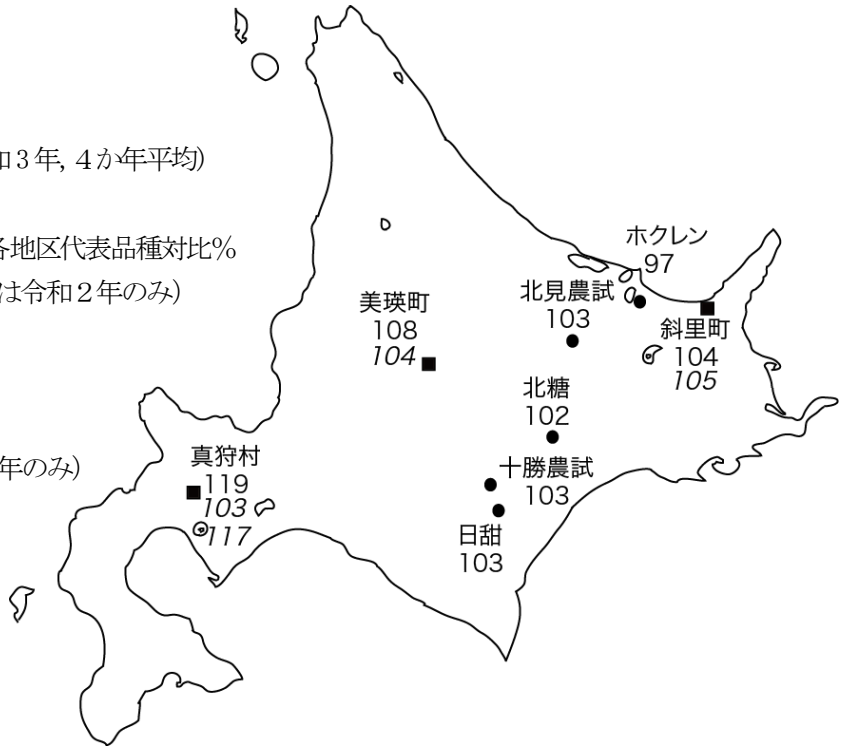
４　普及見込み地帯

北海道

５　栽培上の注意

１）根腐病抵抗性が“やや弱”であるため、適切な防除に努める。

図「H154」の糖量

●　：てん菜輸入品種検定試験
「パピリカ」対比％（平成30～令和３年，４か年平均）

■　：輸入品種現地検定試験成績
「アマホマレ」対比％、斜字体は各地区代表品種対比％
（令和２，３年、２か年平均、美瑛は令和２年のみ）
地区代表品種は、
真狩村：「アンジー」（令和２年）
「リボルタ」（令和３年）
美瑛町：「カーベ2K314」（令和２年のみ）
斜里町：「パピリカ」